新刊紹介

望田幸男・田村栄子 著

『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち』

長田浩彰

「なぜ、カントやゲーテの国でヒトラーが？」という疑問は、素朴ではあるが、本源的なものであろう。近年、野田宣雄氏もその著書に於てドイツの知的エリートたる「教養市民層」とナチズムとの問題を比較宗教社会史という視点で扱っておられるのは衆知の通りである。本書もまた同様の疑問に答えるべく、その対象を「教養市民層」予備軍ともいえる大学生やギムナジウム生徒（若きエリートたち）にとり、彼らの教養形成の場たる中等学校の制度的変遷と、彼らによる自立的青年運動の変遷を一九世紀末からナチ第三帝国までのスパンで分析・考察している。従来の青年運動を取り扱った著述と比較して本書に新しい点は、まず第一部として、運動の担い手たちが学び、精神の形成をした場である中等学校と、その教育について立ち入った分析を行った点であり、更に、第二部では、自立的青年運動とナチズムとの関係を問う際に、非エリート的で、かつ、ある意味で自立的でもないヒトラー・ユーゲントではなく、その逆の存在と言える「ナチス学生同盟」を分析対象として取り上げた点である。以下、目次にそって本書の概略を追ってみたい。

第一部第一章では前述の通り、知的エリートへの道たる九年制中等学校＝ギムナジウムの生誕から、今世紀初頭の三系列中等学校（ギムナジウム・実科ギムナジウム・高等実科学校）の同格化までの歩みが、まず整理される。

一九世紀初頭のプロイセンにおいての改革により、教育資格試験と大学入学資格（アビトゥーア）試験が導入された。そして、後者を実施でき、かつ大学教育を受けた教師を雇用できる一部のラテン語学校だけがギムナジウムと公称できるようになった。一八三四年には、大学独自の入試は廃止され、アビトゥーアはもっぱらギムナジウムに任されるという「ギムナジウム体制」（ギムナジウムによる大学進学独占）が成立した。それにより、ギムナジウムとそれ以外の実科系学校という複線型教育体系が鮮明化していくが、一九世紀後半には、工業化の進展にともなう実学的教養の重要性がクローズアップされ、教育の「外」からも、また、実科系学校の整備によ

る「内」からも「アビトゥーアに関する同格化」が強く要請された。すなわち、ギムナジウムの古典的教養偏重に対して、国家主義の見地からの「右」の批判勢力と共に、教育の機会均等を求める勢力、これに対してギムナジウム特権を守ることを通じて社会的文化的秩序を維持しようとする勢力、これら三つの潮流とは別種の脱制度的批判勢力、これらの対抗・交錯の帰結が、三系列中等学校の大学進学における同格化であった。

第二章では、この制度的変遷の中で、現実にはどのような実態が展開されていたのかが問題にされ、まず、就学率から始めて、生徒の社会的出自を明らかにすることにより、ギムナジウムが「教養市民層のための教養市民層の学校」という通念が批判される。ギムナジウムの生徒と言っても教養市民層の子弟ばかりでなく、むしろ中間層の子弟が多く、また、大学まで進学しエリートの道を歩む者と、多数のそうでない者とが並存していたのである。次にギムナジウムでの授業内容が問題にされ、古典語＝「死語」の教育が決定的な重みを帯び、この「虚学性」＝非実用性が大衆からの切断の感覚を生み、エリート意識を支えていたことが明らかにされる。それはまた、影の部分として、過重な束縛、負担を生徒に強いるものであり、脱学校ないし脱制度化の欲求を生徒の側に生み、世紀転換期に広がりを見せるワンダーフォーゲル運動を生んでいく。

さらに第三章では、ワイマル期に上述のような「ギムナジウム体制」がどういった変容を遂げたかが扱われる。まず、戦中から強まっていたドイツ・ナショナリズムへの傾斜という点から「ドイツ的陶冶」（＝生の哲学と文化哲学の見地から捉えられた古典的ドイツ理想主義の精神）としてドイツ学、文化学が提示された。それにより、ワイマルの政治的、社会的諸対立を乗り越えるかすがいが期待され、制度面として、古典語を教えない九年制のドイツ高等学校が新設された。しかし一方で、それらにより、「ギムナジウム体制」はワイマル末期には崩れつつある様相を読み取れるが、他方で、ラテン語必修校（ギムナジウム・実科ギムナジウム）のアビトゥーア取得での相対的優位はいぜんとして続いていたのも事実であったことが統計的分析で示される。

彼らギムナジウム生徒や大学生の現実的な「知的エリートへの道」は、ワイマルにおいては、かなり閉塞状態にあった。ワイマル期自体が、敗戦後の大インフレから始まり、相対的安定期を経て、二九年には世界大恐慌にみまわれるといった状況であった。その上、アビトゥーア取得者の増加、女子学生の増加などによっても、ドイツの大学生は更に就職難に悩まされ、頭脳プロレタリアートへの脅威、アルバイト学生の増大、また、登録学生（フルタイムで働き、登録だけしているもの）といった言葉も生まれた。

一九世紀後半以来のギムジウム批判に皮肉にも答えることになったのはナチス期の変革であったが、そこでの教育目標は、教養ある人間という「虚像」を廃し、血と宿命の民族的連帯のもとに闘い、行動する人間の教化・養成であり、非政治的な人文主義的教養イデオロギーを排したナチ・イデオロギーという「政治の優位」を貫徹したものであった。以上が、第一部の概要である。

第二部では、一変して、そういった学校制度に身を置いた生徒、大学生を中心とした自立的青年運動と彼らの思想にスポットがあてられる。第四章でまず扱われるのは、宗教・学校・教会などを通じての画一化や制度化に対する反発として一九世紀末生まれてくるワンダーフォーゲル運動である。それはいわば、流浪する「中世の探求者」であり、ロマンティックな過去＝中世ドイツへの憧れと共に、

工業化と機械化の近代世界に背を向けるものであり、リーダーを中心とした「集団への忠誠」を基調とした新しい青年運動の形式を持っていた。ここに「大人社会」への抗議としての青年による世代間闘争がスタートするが、これはまだ、政治社会に正面から向き合ったものではなく、特定の政治イデオロギーを志向するものでもなかった。青年運動の第二段階は、とりわけ、第一次大戦前に、一方での政府・軍や、社会民主党・労組などによる青年の組織化の動きに対し、政治的大衆闘争ではなく、文化的ヘゲモニーの確立によってドイツを再生せんとした「自由ドイツ青年」大会（一九一三）であった。ここでは運動の担い手は、ギムナジウム生徒から大学生へと移行し、その内容は、現状変革を志向する思想的なものへと深まり、ヴィルヘルム社会の現状を強く告発する非政治的非党派的対抗文化運動の様相を呈した。しかし彼らは、第一次大戦へと巻き込まれ、その際、体制への反発・批判と個人の解放を根底にすえて「青年の階級闘争」へと向かうか、あるいは、自民族の存在を至上のものとしてあるべき国家像を構築するか、厳しい選択を迫られることになった。こうして自由ドイツ青年運動は、大戦後、それ自体としてごく自然な終結を見いだしたのである。

第五章では、自由ドイツ青年運動の衰退過程と相応して、社会の全体的改革を目指す「青年の使命」にもえた運動として始まる「同盟」青年運動が取り扱われる。つまり、帝政の崩壊後あらゆる可能性が開かれたと感じた青年たちが、共和国＝大人社会の無為無策に幻滅し、失望した後に生み出したそれは、自分たちこそ社会の変革の核たる戦闘的騎士団であるという意識を先鋭化させ、「青年の自立」といった漠然としたスローガンに変わって、明瞭な盟約、厳格な規律を有する諸「同盟」の並存であった。これらは、前二者の青年運動に比べて、結集人員もきわめて少なく、思想的にも多彩であり、明確な総括は困難であるが、統一的な基本思潮は以下の通りとなる。つまり「同盟」青年運動は、現状に代わるべき「ライヒ（国）」を創出するために、「新しい人間」をつくりあげることを根源的課題と考え、そうした人間を陶冶・育成する場として、「同盟」を位置づけ、そこに、あるべきライヒのモデルを見ていた。また彼らには、非政治的ではありながら、一方で青年こそ「全体的改革」の担い手であるというきわめて強い「政治的」意識が見て取れる。しかもこの特異な「非政治性」は、「生の哲学」に刻印され、非合理的・ロマン的なものであった。また、あるべき新しい理想社会＝「青年の国」を作るのは青年世代であるという彼らの「青年革命」論は、精神的・非政治的であるとはいえ、現実の国家・社会・政治を民族内対立をもたらしている原因として憎悪の対象とし、それに代わる民族共同体創出を希求するものであった。それ故、ナチズムの台頭を眼前にして、彼らは、自ら墓穴を掘ることになったのである。

終章である第六章で扱われるのは、上述のような、若きエリートたちの中に胚胎していたドイツ教養主義への懐疑や脱共和国・反共和国の意識を共和国打倒の方向に結集していったナチス学生同盟である。これは、現状否定の論理としての社会主義のスローガンと共に、ナショナリズムの見地から、民族のための学問・民族の指導者としての知識人、という若き知的エリートたちにとっての新たな理想像を呼びかけた。つまり彼らのナショナリズムにおいては民族が中心になり、社会主義もそれに奉仕するもの、また望ましい民族像も人種的に純粋な構成体とされ、「反ユダヤ人革命」論が唱えられる。それらは、現状打破の論理として、大学生たちにとっては自分たちの学問と人生が向かうべき方向指示器と映った。「同盟」青年

運動の場合は、ドイツ教養主義への懐疑は存在するが、学問・教養が人間的価値の追求であり、「生」の充実にいたるものであるという教養主義の精神までは否定されていなかった。それに対してナチス学生同盟が提示したのは、赤裸々な政治主義ではなく、政治こそ真の精神主義であるという「超政治の論理」であった。彼らは、「反ユダヤ人革命」を目指す学問・生こそが真の学問・生であると主張した。自立的青年運動を貫いていた「非政治の論理」はこの「超政治の論理」に敗退したのである。

以上が、本書の概略である。第一部として、知的エリートたちの思想形成の場＝ギムナジウムの社会史が扱われたことで、第二部でのドイツ青年運動の理念の社会史がよく理解できるといえよう。ただ、ナチ党からの積極的支援なしに、知的エリートの側から自立的に成立したナチス学生同盟の存在自体に、「超政治」に対する「非政治」の単なる敗退以上のものを感じ取るのは誤りであろうか。現代の教育問題にも通じる重要な問題を扱っている本書の一読を、諸氏におすすめしたい。

（一九九〇年一月刊、有斐閣選書、二八〇ページ、一七〇〇円）

（広島大学文学部）